

(12/11 朝日新聞に掲載された松丸会長のオピニオン要旨)

国から補助金をいただいてメダルをめざす。今までは、それこそが競技団体の使命だと思っていた。メダルを取り、国民の皆さんに感動をお届けし、競技の普及にも繋がれば使命を果たせると考え、選手強化に多くの力を注いできた。

ただ、東京オリンピック（五輪）・パラリンピックを終えて、それだけで十分なのか疑問に思うようになった。なぜなら、コロナ禍にあって東京大会を開催すべきなのか否かが、世論を二分して問われた。こういう時に五輪をやっていいのか、という開催に反対の方が国民の半分もいらっしやったからだ。

大会に入ると、多くの国民に応援をいただけた。ただ、メダルの獲得数に関する報道は控えめになり、メダルを取らなくても素晴らしいチャレンジをした選手がフォーカスされることも増えた。選手や競技団体はメダルをとるだけでなく、

社会に価値のあるモノをいかに発信できるかが問われた大会だった。今後も当然、競技団体としてメダル獲得はめざすが、組織としての目的、社会的な存在意義を考えたとき、メダル以外の社会的な価値を自分たちで創出していかないといけない。

東京大会のビジョンである「多様性と調和」「共生社会の実現」にスポーツが何ができるかが問われている。

日本ライフル射撃協会は今月 18 日、五輪とパラリンピックの選手がチームを組んで競い合うミックスイベントを開催する。ライフルは元々、男女が混合で競い合う競技だが、それだけでなく、健常者と障害者がともに競い合えると考えた。

来年の日本選手権は男女、健常者、障害者が混合で競い合うことも想定している。きっかけは東京パラリンピックだった。ライフル射撃の下肢障害競技では、義足をつけて立って撃つ選手、高いいすに中腰で腰かけて撃つ選手、車いすに座って撃つ選手がいた。

これまでスポーツは公平性を重んじ、同じ条件で競うことにこだわってきた。だが、パラを見て目からうろこが落ちた。スポーツは本来、条件は違えども、その競技を通じていかに個人がベストを尽くすかが重要なのだ、と感じた。

比較ではなく、自分を超越すること。近代五輪の創始者クーベルタン男爵が言って目指していたことをパラアスリートは体現していると感じた。五輪・パラ混合

の競技会を開催することで、多様性や共生社会の実現へ一歩踏み出したいと思う。

また、構える、狙う、引き金をひくというライフル射撃の動作は、脳を活性化させるという実験結果も出ている。協会としては今後、レーザー銃を使い、老化防止の事業を進めようと考えている。他の競技団体も、常にフィジカルとメンタルが

連携した強化を行っている。こうやったらこの筋肉が痛めるとか、痛めた筋肉はこうリハビリすればすぐ治るとか、こうやると集中できるとか、競技団体ごとに知見を持っているはずだ。スポーツ団体が蓄積してきた知見を生かし、健康寿命の延伸、

予防医学、や共生社会の実現に取り組むことに意義はあるだろう。競技団体がメダル獲得だけでなく社会課題の解決に貢献し、人々から必要な組織として認められ、社会的な存在価値を持つときに、はじめて公益に資する公益団体といえるのかもしれない。